

機関番号：33905

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520520

研究課題名 (和文) Intelligibility を高めるための発音指導法および評価尺度の構築

研究課題名 (英文) The development of instructional models and assessment measures of Intelligible pronunciation of English

研究代表者

小田 節子 (ODA SETSUKO)

金城学院大学・人間科学部・准教授

研究者番号：30364665

研究成果の概要 (和文)：

急速に国際社会での英語使用が増え、同時に多様性が広がる中で、相互の英語のわかりやすさ (intelligibility) を保つ努力がより一層必要とされている。本研究では、日本の英語学習者の目指すべき intelligibility の検証を目的とする。その結果、話し手としては、母音の長さのコントロールが重要であることがわかった。他方、日本英語を聞く立場からは特に重要な知見はなく、よく言われる「多様な英語変種への慣れ」は intelligibility に大きくは寄与していないことがわかった。一方、日本英語の話者の立場から、intelligibility に大きく貢献するのは、母音の長さであるという結果が出た。これにより、様々なレベルの発音教育の中で、母音の質、と同時に母音の長さ、について学習者の注意を喚起することがのぞましい、と考えられる。

研究成果の概要 (英文)：

The issue of intelligibility has been of strong interest among researchers and scholars over the last several decades. World Englishes scholars suggested that it is necessary to differentiate intelligibility and comprehensibility and assign specific meanings to them.

Our aim for this study is twofold. Our first concern is whether familiarity and exposure to a certain variety increases the intelligibility/comprehensibility of that variety, which is, in our case, Japanese variety of English. The other issue we examined was which speaker factor(s) might contribute to increased intelligibility of Japanese English.

Results show that (1) familiarity to varieties of English does not necessarily enhance intelligibility and (2) vowel length seems to be a crucial factor in improving the intelligibility of Japanese English.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語、国際英語、聞きやすさ、英語教育、英語の発音、聞き取りやすさ (intelligibility)、日本人英語話者、国際コミュニケーション

## 1. 研究開始当初の背景

グローバル化する現代のコミュニケーション事情の中、事実上唯一の世界共通語として英語使用は拡大し続けると同時に多様化が進むと、お互いの英語が理解不能になるというパラドックスに陥る危険性が、Larry Smith(1992)によって指摘されている。

また、日本人の英語は通じにくい、という風評もある。それどころか、当の日本人すら、自分たちの発音に殊更コンプレックスを持っている例が少なくない。

この状況の中で、日本人が世界に通じる英語を使えるようになるには、日本人の持つ様々な特性を加味して、現実的に到達可能な英語学習のゴールの設定が不可欠である。それには、日本人の英語を分析し、その結果に基づいて、教授法を構築する必要があった。

一方で、聞き手側の要因として、様々な英語を聞いて、慣れておくべきである、という研究者は多くいる。印象的には、正しいように思われる。本当に、日本人の話す英語に、慣れている人には、日本人の英語は聞き取りやすいのであろうか？こちらの方も、検証することにした。

## 2. 研究の目的

前項目と重複するが、とにかく、国際コミュニケーションで通用するところの、文科省の掲げた「英語のできる日本人」を育成するには、これまでのような、英米モデルを追い求めることは、効率的にも、現実的にも、有効でないことは自明である。

枠組みとして、Jenkins (2007)の提唱する English as a Lingua Franca 論を用いた。Jenkins は、拡大する英語使用の中で、英米語としての英語ではなく、現代の Lingua Franc (共通語)としての英語使用を提唱する。

現実の、英語によるコミュニケーションは、そのほとんどが、非英語母語者間で行われているのであるから、その共通項を見出し、他の部分はそれぞれの母語に合わせて適宜運用すればよい、という考え方である。

この、目的を国際コミュニケーションに特化した枠組みの中で、日本人学習者は、日本語の音声体系をうまく生かしながら、国際コミュニケーションで通用する、という目的に絞って、発音の習得を目指すことが、日本人のコミュニケーション能力を高める大変有効な方法であると思われる。

それには、日本人の英語の発音のどの点が通じやすいのか、通じにくいのか、データを集めて検証し、教授法を構築する必要があった。それが、本研究の主目的である。

もうひとつの目的である、聞き手側の要因の検証であるが、familiarityのあるもの、つまり日本人の英語になじみがあるものにとっては、日本人の英語は聞きやすいのか、

という点に焦点を当てた。Larry Smith は、その古典的な intelligibility 研究の中で、なじみのある変種に対する理解力は上がるのであるから、英語学習者は、押し並べて、様々なバラエティを聞く必要があることを強調した。

これが新たに実証されれば、日本人の英語を通用させるには、世界の英語学習者が、日本人の英語に対して慣れればよい、ということになる。また、いきなり会話を始めるのではなく、お互いに「慣れ」のための時間を増やすことが重要、という示唆もできるであろう。

このように、聞き手、そして話し手、の両面から、日本人の話す英語、の intelligibility を高める要因を突き止めることが本研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

まず、日本人学習者 20 人の話す英語のサンプルをとった。東京都、および広島県にある2つの大学から、男女、専攻、英語の習熟度、等を考慮し、様々なレベルの英語サンプルを収集した。

そのサンプルは、まず、バイリンガルの日本人英語教員(レクター)7名によって、様々な角度から、分析された。母音の質、長さ、子音の質、母音を加えて発音してしまう日本人の特性、語彙の特徴、その他19項目に上った。

その後、スピーチサンプルを、聞き手である、アメリカ在住のアメリカ人大学生40名、シンガポール在住のシンガポール人大学生75名に聞いてもらい、アンケート形式で、聞き取りやすさに関してのアセスメントをもらった。日本在住の外国人ではなく、居住国に出かけて直接データを採集できたことは、実際の国際コミュニケーションの現実を反映させることができ、意義が大きかったと考えられる。

レクターのデータと、聞き手であるシンガポール人、アメリカ人の聞き手のデータを、統計ソフトを用いて、相関係数および回帰分析を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 結果の分析

統計分析の結果から、聞き手側、そして話し手側の両方の立場から、intelligibilityにかかわる要因が抽出された。

まず、聞き手側要因であるが、日本人英語に馴染みがあれば、聞き取りやすさが増す、という結果は、アメリカ人の聞き手にのみ当てはまることがわかった。

つまり、シンガポール人に関しては、日本人英語に関する慣れが、日本人英語のわかりやすさに比例する、という結果は出なかった

のである。これには、色々な要因が関わっていると思われる。英語が母語であるアメリカと、英語が公用語であるシンガポールの、元々英語に触れる量がそもそも違う可能性もある。その中で、「日本人英語に慣れている」と言っても、その量、実際の状況は、違っている可能性も考えられる。どれくらい実際日本英語に触れているのか、またどれくらい日本英語に触れば *intelligibility* が上がるのか、抽出することは困難である。研究者の中には、「様々な変種に触れること」を英語教育に取り入れることを強く示唆する者も多いが、少々非現実的な話である、ということが明らかになった。

これにより、話者側の要因が、より重要、ということが明らかになった。話者側で、*intelligibility* を高める要因を突き止め、日本人である話者が、自分の英語をコントロールする術を身につけられるよう、その対策を講じる教育法を構築することが、現実的であり、効率的であろう。

話者側の要因の統計分析の結果であるが、シンガポール人、アメリカ人ともに、驚くべき結果がでた。両方の聞き手とも、*intelligibility* を高める要因として回答した、19 要因のうちの最上位の五要因が完全に一致したのである。それらは、母音の長さ、流暢さ、論理の一貫性、自信のあるなし、そして語彙の選択、の五つであった。

ところが、回帰分析により、決定的な要因を抽出したら、少し違った分析結果が出た。アメリカ人の聞き手にとって、日本人英語の *intelligibility* が高くなる決定的な要因は、「母音の長さ」及び「流暢さ」であった。一方で、シンガポール人の聞き手にとっては、決定的な要因となるのは、「母音の長さ」のみ、ということがわかった。

「流暢さ」は、アメリカ人にとってのみ決定的、となるということに関して、これは、母語話者に好まれる資質なのかどうか、限定はできないものの、非母語話者であると考えられるシンガポール人に、流暢さ、ということが、*intelligibility* を高める決定的な要因ではない、ということは意義深い。

英語による国際コミュニケーションは、英語母語話者を含まないものが大部分であることは、はじめに述べた通りである。それならば、英語母語話者、非英語母語話者ともに決定的な要因である、という結果が出た「母音の長さ」に焦点を当てて、発音教育をしていけば、必要十分、と言えるのではないだろうか。

## (2) 発音教授法の構築に向けて

この結果により、日本人英語学習者の、発音学習、発音教育に関して、新しい視点が加えられた。これまで、日本における発音教育

は、子音をいかに英語母語話者に近づけるかに余りに焦点が置かれていた。たとえば、L と R が区別できない点を、なんとか克服しようとする努力の大切さが、「L と R を区別できない日本人」などと多少の揶揄をこめて、強調されすぎていたきらいがあると思われる。

また、母音に関しても、*ship* と *sheep* の違いは、音の長さではなくて、音の質なのだ、というような発音に関する豆知識も聞かれる。もちろん、質も違うのであるが、長さも違うことは明らかである。日本語には、元々長母音と短母音があるため、この二つを発音し分けられない日本人学習者はほとんどいないと考えられる。長母音、短母音の区別のない言語（中国語など）ではこの区別が大問題となる。

つまり、音の長さに関して、全く注意を払っていなかった、というのが現実であろう。その結果、*ship* と *sheep* というような、長母音と短母音の *minimal pair* はともかく、他の、母音が長くなるような場合には対応できていなかった可能性が考えられる。

例えば、ひとつには、*bid* と *bit* のように、後ろにくる子音が有声音か無声音か、ということで母音の長さが変わってくる場合である。これに対応できている学習者はあまりいない。

もうひとつは、*dog* と *dug* のように、元々の母音の質も違うのはもちろんのことながら、長さにもかなりの違いがある単語の区別についてである。*dog* は、*dug* に比べて、母音が長く発音される。この音が、長母音、という理解をしている日本人学習者はほとんどいないはずである。しかし、辞書によっては、長母音という記述も出ている。特に、日本人が主たる規範としているアメリカ英語では、これは長母音として発音されている。

これまでは、どちらかという、*dug* のような、あいまい母音に近いような音を発音するのが、日本人は苦手である、というような議論が多かった。しかし、それだけではなさそう。逆に、この場合はあいまい母音ではないが、*Jenkins* の E L F 論によれば、あいまい母音は、不要、という知見がでているのである。

それならば、「あいまい母音」を発音練習させる努力を、「母音の長さ」に、もっと意識を向けさせる努力に持って行ったらいいのではないだろうか。

現在、実際に現場でこの教授法を用いて発音教育を施し、その結果を収集中である。いずれ複数の教員にそれを依頼し、さらに追及することになっている。

英語教育には、「モデル」が不可欠だ、といわれる。確かに、何のとっかかりもなく、発音を自力でマスターすることは不可能に

近いであろう。しかし、だからと言って、母語話者の英語を聞いてマネする、という解決もまた難しいはずだ。多くの学習者は、たとえばCD等の音源を聞きこんでネイティブの発音を忠実に真似よう、というほどの意気込み、根気はない。ネイティブ教員へのあこがれ、ネイティブ英語へのあこがれからくるネイティブ教師志向はあるとしても、それが、直ちに英語の発音が向上する結果にならない、ということもうすうす気づいている。

母語話者、非母語話者にかかわらず、英語の運用能力、コミュニケーション能力に優れている教師の英語を徹底的に聞かせて、それをモデルとさせる、という手法が一番確実なものであると考えられる。

ただし、聞かせる英語は、「ネイティブ英語」でもなければ、「日本式英語」でもない。「国際的に聞き取りやすさの高い」英語、である。英語母語話者の教員であっても、自分の元々の変種よりも、国際共通語、Lingua Franca としての英語を優先させるべきなのである。それには、まず、教師自身の英語を、国際共通語としての英語として通用するものにしておくことが重要なことである。

本研究の、究極的な目的はそこにある。国際共通語としての、聞き取りやすい英語の発音の要因を抽出、それを日本語の特性とてらしあわせて、「コアな」発音体系を確立する。そして、それを、学習者に伝えるべく、まず日本人英語教員にそれを広め、自分の発音のレパートリーに加えてもらう。授業では、そのやり方で発音、発音教授を行う。

言い換えれば、日本人英語教員が、国際共通語としての英語の発音体系をみにつけ、国際コミュニケーションの参加者となったとき、学習者もまた国際コミュニケーションの次世代の担い手、となれるのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

小田節子、田島宏子 “Analyzing speaker and listener factors affecting the intelligibility of Japanese English”  
アジア英語研究 第12号(査読有) 2010、  
pp. 61-77

[学会発表] (計6件)

① 小田節子、”International intelligibility and ELF pedagogy”、English as a Lingua Franca 年次大会、2011年5月26日、香港

② 小田節子、”Formation and globalization of Japanese English”、Asia TEFL 年次大会、2010年8月8日、ベトナム、ハノイ

③ 小田節子、”Negotiating Japanese English pronunciation for international intelligibility”、International Association of World Englishes 年次大会、2010年7月26日、カナダ、バンクーバー

④ 日野信行、James D’Angelo、田島宏子、小田節子、”The possibility of Japanese English”、シンポジウム、アジア英語学会全国大会、2010年7月2日、神戸芸術工科大学

⑤ 小田節子、”How can we increase intelligibility of Japanese English?” International Association of World Englishes 年次大会、2009年10月24日、フィリピン、セブ

⑥ 小田節子、田島宏子  
”Developing an English teaching method catered to Japanese students’ needs” アジア英語学会全国大会、2009年9月20日、熊本学園大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小田節子 (ODA SETSUKO)  
金城学院大学・人間科学部・准教授  
研究者番号：30364665